

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25750278

研究課題名(和文) フィリピン農村にみるスポーツと社会移動の動態 アスリートと出身家族の生活分析

研究課題名(英文) Research on sport and social mobility through the case of Filipino boxers

## 研究代表者

石岡 丈昇 (ISHIOKA, Tomonori)

北海道大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：10515472

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、フィリピンのボクサーを事例に、スポーツへの参加がどのように社会移動を引き起こすのかを検討した。申請者はフィリピンのスポーツを主に研究する者であるが、なかでもボクシングは貧困層の若者が多く参入する競技であり、競技を通じた社会移動が明瞭に見て取れるものである。かれらの出身農村の背景にまで立ち返って、スポーツ参加がどのようにボクサー個人およびその家族に社会移動のインパクトをもたらすのかを検討した。結果としては、昨今のグローバル化のなかで、ボクサーの何人かがフィリピン国内を超えて海外にまで移動する最先端の事例を把握することができた。

研究成果の概要(英文)：Though case studies of boxers living in rural areas in the Philippines, this study has elucidated the impacts of sport participations of the youth through the lens of social advancement. In the country, boxing is a sport of which young people from deprived socio-economic backgrounds are interested in. Hence boxing is a strategic subject to consider the connection of sport participation and class mobility. The study makes sociological accounts in details about the boxers' family backgrounds, life course, and future expectations. Furthermore, in the process of globalization, it is showed that some of the boxers have opportunities to work in abroad by using his skills of the sport, which is a notable finding in the study.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：フィリピン 社会移動 ボクシング

### 1. 研究開始当初の背景

スポーツ社会学分野における第三世界のアスリート研究において、アスリートの元来の生活根拠が都市ではなく農村にあることは、これまで幾度か指摘されきた(坂本 2006)。しかしながら、その実態調査は、世界的に見ても、ほとんど手つかずの状態にある。本研究は、フィリピン農村の事例から、社会移動の観点より、グローバリゼーションの時代におけるスポーツ参与の社会学分析をおこなう。

### 2. 研究の目的

本研究は、フィリピン農村地域の調査をおこない、そこから世界的に見ても稀有な第三世界農村におけるスポーツと社会の複合様相を捉える研究を目指す。

本研究は、国内外で研究が蓄積されつつあるスポーツ移民研究を展開することを目標としている。1990年代以降、グローバリゼーションの時代における第三世界アスリートの地域・国際移動が議論されつつあるが(Bale & Maguire 1994)、本研究は次の二点でこれらの研究を乗り越えるものである。

第一に、既存の研究は、送り出し=受け入れ関係(ex.アフリカから欧州へのサッカー選手の移動)に注目した政治経済分析を試みているが(Poli 2010)、本研究はこうした移動過程のみならず、引退後の帰村までも射程に入れた全体的生活過程を対象としている点である。出身母村→都市・国外への移住→帰村という全体プロセスを捉えることで、移民研究を生活過程論の視座から補強する試みである。

第二に、都市からの視点ではなく、農村を基盤とした調査をすることである。既存の研究は、先進国・第三世界の都市に暮らすアスリートを論じてきた。しかし、本研究は、農村からどのように都市へと選手が輩出され、その後、村の家族生活がどう変容し、さらに引退後の村での生活をどう営んでいるのかを論じる。すなわち、「第三世界農村からみたグローバリゼーション」を論じる点に独自性がある。

### 3. 研究の方法

申請者のこれまでの研究より、フィリピンにおいて、多くのボクサーが農村出身であることがわかっている。マニラ首都圏パラニャケ市にあるEボクシングジムに在籍していたボクサー47名の出身地をみるとボクサーの多くはフィリピン中南部の農村地域の出身であることがわかる。

なかでも、最も多くのボクサーを輩出しているのが、東部ビサヤ地方である(20名)。この地方には、著名な指導者が複数おり、ボクシングが盛んな地方である。よって、この地方の代表的ボクシング拠点であるレイテ島バト町を本研究の調査地とする。また、ソクサージェン地方は5名にとどまるが、この地方はフィリピン第二の都市圏であるセブ市周

辺に多くのボクサーを輩出していることから、この地方内のリバク町も調査対象地とする。

フィリピン農村におけるボクシングと社会移動を実証的に解明するためには、少なくとも次の三つの局面での分析が必要となる。

(1)農村においてスポーツに参入した段階での生活分析、(2)キャリア継続のため都市部に移動した後の経済的・社会関係的・情報的変容の分析、(3)引退し農村に帰村した後の生活分析、である。

しかし、(1)~(3)をトータルに把握するためには、最低でも5年間の時間を必要とする。なぜなら、ボクサーは平均して5年ほどのトータルキャリアを積むからである(農村でのアマチュアボクシングと都市に移動後のプロ転向後のキャリアを総合した場合)。よって、本研究では(1)と(2)に照準し、(3)については予備調査にとどめる。そのため本研究は、「農村の若者がボクシングに参入し、さらに村から都市へ移動することで、彼らにどのような生活変容・社会移動が生じるのか」を解明する。

本研究では、以上(1)・(2)のプロセスを、ピエール・ブルデューの文化資本論を援用し考察をおこなう。

(1)については、ボクシングに参入した若者の家族状況を、経済的・社会関係的側面のみならず、文化的側面から分析する。ブルデューによれば、個々人の文化的趣向は、経済的条件と密接なつながりを有している。フィリピン農村において、ボクシングを好む社会層が貧困層であることは、申請者の予備調査からも明らかになっている。収入額や耐久消費財の所有具合といった経済的変数にのみならず、そこを貫く文化的傾向性を分析し、それが後にいかに変容するのかを捉える元データとする。

(2)については、次の三点から分析する。経済的変容、社会関係的変容、情報的変容である。具体的には、都市でファイトマネーを中心とした収入を得ることで生じた本人および農村家族の経済的変容を解明し(経済的変容)、都市でボクシング界を中心に得られたネットワークがどのようにその後の生活に影響しているのかを捉え(社会関係的変容)、昨今成長の目覚ましい携帯電話やインターネットを介して、どのように都市情報が農村生活に入り込み、さらには生活変容を引き起こす契機となっているのかを分析する(情報的変容)。

これらを通じて、農村から都市へとボクシングを契機に出郷した若者が、母村家族も含め、どのような生活変容を経験するのか、またそれがいかなる社会移動の達成へとつながるのかを考察する。

本調査研究は、グローバリゼーションの時代とされる今日的な社会状況と切り結んだ成果公表を目論んだものである。よって、海外のインテンシブなフィールドワーク(=対象の現代性)と成果の国内外での公表(=成果公

表の現代性)に出来るべく企画された調査研究である。

日本のスポーツ社会学の学的状況を見直すならば、海外調査をおこなう研究者自体が皆無であり、一国的な視座に閉じた研究姿勢を学界として共有している状態にあるといえる。本研究は、こうした学的趨勢をブレークスルーし、よりグローバルな文脈から現代スポーツシステムの解読を試みている点で、従来の諸研究を大きく乗り越える内容を備えるものである。

#### 4. 研究成果

本研究で得られた知見のうち、特に興味深い内容である国内移動を超えた海外への空間移動と、それに関わる社会移動(およびその当事者感覚)に焦点を絞って、本節を記述したい。

##### 出身背景

ボクサーたちがプロボクシングに参入する以前の生活状態は大きくふたつに分けることができる。ひとつはボクシングをするために故郷からマニラに出てきてボクサーになるというもので、もうひとつはマニラで職にあぐら失業中の者がジムに入門するというものである。

このように農山漁村からボクサーになることを目指してジムにきた者と、マニラでの都市生活の厳しさの中でそこからの脱却を目指してボクサーになることを決意した者が入り混じってチームは構成されている。後者の場合、ボクシングそのものへの魅力や憧れというよりも、厳しい都市の暮らしを生き延びるための便法としてボクシングを始めた者が数多い。

ボクシングという実践をおこなうにいたる背景には経済的な要因だけでなく文化的なそれが大いに関係するため、経済的貧しさが彼らをボクシングに向かわせたとする断定的説明は廃する必要がある。そのことをふまえた上で、それでもマニラ首都圏出身者がいない点より、ボクシングが経済的貧困と何らかの相関があると考えることも可能ではあろう。

##### スポーツと社会移動、海外移動

ひとりの象徴的な事例から、海外移動のメカニズムについて記述する。

ペデリト・ローレンテ(仮名)は、1999年から2007年まで活躍したフィリピンボクサーである。現役時代には東洋太平洋スーパーバンタム級のチャンピオンにもなった。生涯戦績は32戦18勝13敗1分である。この戦績だけを見るならば、世界レベルからは程遠い凡庸ボクサーであったように思える。しかしながら、フィリピンのボクシング関係者の多くが、「ペデリトは素晴らしかった」と口を揃える。その理由のひとつが、彼が幾度にも渡って海外で試合をおこなってきた点にある。ペデリトは敗戦の多くを海外で喫している。

全敗戦の13戦のうち9戦が敵地海外での試合である。ボクシングでは敵地で勝利を収めることは非常に難しい。というのも、最終ラウンドを終えて判定にもつれ込んだ際に、3人のジャッジの判定は地元最良の「ホームタウン・ディシジョン」になる可能性が高いからである。よって敵地で戦うボクサーは、自らの戦績に傷をつける(=黒星を刻む)ことを一定覚悟した上で、試合に出場することになる。ペデリトは、こうして海外で数多く戦ったからこそ、戦績に黒星を多数刻むことになったのである。そして、こうしたペデリトの姿勢を知っているからこそ、フィリピンのボクシング関係者は、表面的な戦績に示されないペデリトの力量を褒め称えるわけである。

ペデリトが敵地で数多く戦ってきた理由を理解するためには、ボクシングのマッチメイク・システムを押さえておく必要がある。ボクシングの試合は、プロモーター(主催者)、マッチメイカー(出場選手の選定と交渉)、マネージャ(ボクサーの支配人)の三名で取り決めがなされる。フィリピンボクサーが日本で試合をする場合、日本のプロモーターが開催地と日時をまず決定する。その上で、プロモーターよりマッチメイカーに相談が持ちかけられ、プロモーターの興業主旨に沿った試合カードが決定される。その後、マッチメイカーは、試合カードに名前が挙がったボクサーのマネージャに試合出場を要請する。日時と場所のほか、ファイトマネー(リングに上がるための報酬。そのため、勝っても負けても金額は同一である)の交渉がそこでなされる。試合出場の条件が折り合えば、ボクサーの試合出場が確定となる。

このマッチメイク過程において重要となるのは、プロモーターの経済資本と社会関係資本である。日本のボクサーとフィリピンのボクサーが試合をする場合、経済資本に勝る日本のプロモーターが自国での試合を要請する。経済力のある日本のボクシング界のファイトマネーに惹かれて、フィリピンボクサーは海外のリングに上がる。

##### インタビュー結果

それでは、海外移動することをボクサー自身はどう捉えているのか、インタビューでの興味深い語りを引用して、ここでは彼らの移動体験を捉えたい。

リッキーは、日本の試合のファイトマネーはいくらだと聞いてくるので、「10Rを闘うことができるボクサーで50000ペソぐらいかな」と私がいうと、次のように語った。

フィリピンだと10Rでも10000ペソぐらい。日本だと5倍。フィリピンのファイトマネーはほんとに少ない。試合がないと収入はないし、いつまでボクシングやっていくかもわかんないよ。エディボイ知っているだろ、4月には、エディボイはボクシングやってたし、その後タイで試合もや

ったけど、そのタイの試合が終わってからは、俺に「1週間だけプロビンスに帰る」って言って、次の月曜には帰ってくるっていったのに、全然帰ってきやしない。エディボイはミルク代だけを稼ぐためにタイの試合をやって、だからその試合が終わったらリタイヤするって、たぶん決めてたんだ。結婚とかね、あと子どもとか抱えちゃったら、ボクサーで養うのは難しい。(リッキー)

あるいは次のような語りもある。

俺はボクシングで10Rまでなったから、これで飯を食えるし、セブ島にいる子どもにもお金を送っている。前の試合はタイ、そこでファイターマネーは、全部セブに送った。でもボクサー、試合しなかったらノー・マネー。次の試合はマニラ。ファイターマネーはリトル。海外で試合しないとファイターマネーはほんとに少ない。でもワイフはお金を貯めて、無駄遣いしないから、今は何とかやっていける。こないだセブに帰ったときに、家族でショッピングモールに行ったんだけど、そのとき、ワイフが俺に渡したのはたったの10ペソ。でもそれでいいんだ、子どもが元気だから。(ピト)

学校は行ってないから、ボクシングしかない。将来は日本で試合をするから、そのときはトモがマネージャーやってくれるよね。(フェルナンド)

フィリピンのボクサーにとって、海外で試合をおこなうことは、とりわけファイターマネーの面において、たいへん魅力的であるようだ。ボクシングでしか収入を得られない彼らにとって、ファイターマネーの金額は自身の生活と直結するからである。けれども次のような語りもあったことを最後に記しておきたい。

6月にはオーストラリアで試合がある。フィリピン、ファイターマネーはほんの少し。だけど、海外はビッグマネー。でも飛行機に乗るのは嫌だし、試合で海外に行くのは良いけど、海外にそれ以外で行きたくない。(ロウエル)

ロウエルはEジムのなかで最もベテランのボクサーの1人で、すでに何回かタイやインドネシアで試合をした経験を持つ。そのため海外で試合をおこなうことの実態を体感しており、いまだそれを体験したことのないフェルナンドやリッキーやフランクリンとは若干違った見解を持っているようだ。

以上のように本研究では、農村出身のボクサーが都市生活をおこない、さらには海外にまで移動する可能性があることを実証的なデータで把握した。同時に、そこには多数の意

味づけがなされていることも把握した。さらなる調査課題としては、こうして海外移動した結果得られた経済的・社会的資源がどのように農村に還流するかであるが、この点については引き続き関心を払っていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

1) Tomonori Ishioka, 2015, How Can One be a Boxer? : Pain and Pleasure in a Manila's Boxing Camp. *International Journal of Japanese Sociology* 24. pp.92-105. 査読有

2) 石岡丈昇, 2014, 「第12回日本社会学会奨励賞【著書の部】受賞者自著を語る: 『ローカルボクサーと貧困世界』」『社会学評論』65-1, pp.134-135. 査読無

3) Tomonori Ishioka, 2013, Boxing, Poverty, Foreseeability: An ethnographic account of local boxers in Metro Manila, Philippines, *Asia Pacific Journal of Sport and Social Science* 1-2 : 143-155. 査読有

4) 石岡丈昇, 2013, 「スクオッターの生活実践——マニラの貧困世界のダイナミズム」、『シノドス』2013年9月12日号. 査読無

5) 石岡丈昇, 2013, 「書評に答えて: 石岡丈昇『ローカルボクサーと貧困世界』」、『スポーツ社会学研究』第21-1号, pp.130-133. 査読無

〔学会発表〕(計5件)

1) Tomonori Ishioka, Ethnographic Fieldwork in Japan, "Qualitative Methodengespräche" im Sommersemester 2015, Ludwig-Maximilians-Universität München, München, Germany, May 29, 2015.

2) Tomonori Ishioka, Boxing as a Team Sport: A Sociological Perspective on Physical Training, 11th Japanese-German Frontiers of Science Symposium, Hotel Inside Melia, Bremen, Germany, October 30-November 2, 2014.

3) 石岡丈昇, 「リズムの受肉——ボクシングジムに埋め込まれた思想」日本体育学会第65回大会体育哲学科会シンポジウム報告、岩手大学(岩手、盛岡市)、2014年8月26日

4) 石岡丈昇, 「貧困の刻印——ボクシングジムから見るマニラの都市底辺」日本社会学会第86回大会奨励賞著書の部受賞者招待講演、慶應大学(東京、港区)2013年10月13日

5) Tomonori Ishioka, Underdog Boxers as Social Products: How Nameless Filipino Pugilists Constitute the Bottom of the Asian Boxing Market, International Sociology of Sport Association 10th World Congress, Renaissance Vancouver Harbourside Hotel, Vancouver, Canada, June 10, 2013

〔図書〕（計2件）

1) 松村和則・石岡丈昇・村田周祐編、2014、『「開発とスポーツ」の社会学——開発主義を超えて』南窓社。総頁数 310。

2) 石岡丈昇、2013、「マニラ」・「ストリートの身体文化と都市」中筋直哉・五十嵐泰正編『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房、pp.10-11, pp44-45.

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

石岡 丈昇 (ISHIOKA Tomonori)  
北海道大学・大学院教育学研究院・准教授  
研究者番号：10515472

### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

### (3)連携研究者

( )

研究者番号：